剣と魔の誓い

Peta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣と魔の誓い

【Ｎコード】
Ｎ７９２４Ａ

【作者名】
Ｐｅｔａ

【あらすじ】
かつて悪魔と呼ばれる種族が荒らしていたこの世界を二人の青年が救い悪魔は滅んだ。それから千年後、再び悪魔が世界を荒らし始めた。１６歳の少年アレンは村で平和に暮らしていた。ある日一人の少女と出会ったことでアレンは運命の歯車に巻き込まれていく。

第零話　プロローグ（前書き）

初めて書きました。感想・評価よろしくお願いします。

第零話　プロローグ

それは遠い昔の話。
この世界を闇から救った二人の青年がいた。
青年達は二人が出会った場所で約束を交した。

- またこの場所で会おう -

それが二人の約束。剣と魔の誓い。

第零話　プロローグ（後書き）

初めまして。ぺたです！剣と魔の誓いを読んでもらってありがとうございます！更新のペースは遅いと思いますが、続きも読んでいただければ幸いです。これからよろしくお願いします。

第一話　出会いは突然に

「ではここをアレン。」
「・・・」
「アレン＝リーヴェルト！」
「！　は、はいっ！」

居眠りをしていた１６歳の少年アレンは突然名前を呼ばれ驚いた。

「まったく、あなたはいつも寝てばかり！私の授業を聞くきがあるのですか！」

怒っているのは歴史担当のアリア先生である。

「ごめんなさいっ！」
「では聞きなおします。今から約一千年前の人と悪魔の大戦はどこでおこなわれましたか？」
「え、え～と・・・」
「まったく！先週の内容ですよ！もう結構です。では代わりにカイル。」
「はい。」

カイルはアレンの親友でクラス一の秀才である。

「現在、聖地とされているリベリアと言われています。」
「その通りです。言い伝えでは剣聖アランと大魔導士ユアンが当時人が住んでいなかったリベリアを戦場に指定したと言われています。では次に・・・」

ここはライラの村。あまり発展しておらず、緑豊かな田舎の村である。
この世界には悪魔と呼ばれる種族が存在している。悪魔は人を喰らい、大地を荒らす人の天敵だった。一千年前、悪魔の長である悪魔王をアランとユアンという二人の青年がが倒し、悪魔は滅び、世界に平和が訪れた。しかしこの１００年の間に再び悪魔が現れ始め、人は悪魔に脅える生活を続けている。

-キーンコーンカーンコーン-

授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

「終わった～～！」

アレンは伸びをして帰る準備をしはじめた。

「ア～レ～ン！」

アレンは声のする方を向いた。話しかけてきたのはカイルだった。

「帰ろうぜ～！」
「はいはい。分かってるよ。」

アレンの家とカイルの家はそう離れていないため、二人は一緒に帰っている。

「しっかしお前はよく寝るな～。」
「うるせえよ！この秀才め！」

他愛もない話をしながら二人は帰路についた。

†††††

「じゃあな。」

「おう。また明日な！」

アレンはカイルと別れ、家に向かって歩いた。いつものように一本道を進む。しかし今日はいつもと違うことがおきた。

「誰か倒れてる・・・。」

アレンの前には同い年ぐらいの見知らぬ少女が倒れていた。

第一話　出会いは突然に（後書き）

長かった！今回は主人公アレンの日常でした。彼は教師にとって授業中の要注意人物Ｎｏ．１です（笑）最後に出てきた行き倒れの少女がもう一人の主人公です。この出会いから物語がどうなるのか！？できるだけ早く更新しますので、今後ともよろしくお願いします。

第二話　崩れた日常

（どうしよう。）

目の前で倒れてる少女を見て思った。

（ま、いいや。俺には関係無いしね。）

そんなことを考えながら通り過ぎようとした時、

ガシッ

「うわぁ！」

突然倒れていた少女に足をつかまれた。少女は気を失っていると思っていたアレンは声をあげて驚いた。

（あ～びっくりした～！）

「ちょっとアナタ。こんなに可憐でか弱い乙女が倒れているのに家に連れていって休ませてあげようとか思わないの！」

少女は一方的に喋っていたがアレンは全く聞いていなかった。そんなことよりもアレンには気になることがあった。

（どこかで会ったことあるような・・・）

アレンは少女を知っている気がした。

（気のせいかな？）

そう思うことにした。

「アナタ聞いてるの！」

「聞いてない。」

「なっ！もういいです！勝手にアナタの家までついて行きます！」

「・・・」

アレンは声も出なかった。

（か、勝手過ぎる！）

そして少女の眼を見て悟った。この少女には何を言っても無駄だと。

「ハァ、もういいや。勝手についてきな。」

そういってアレンは歩き始めた。

「ちょっと待ちなさい！」

「そういやキミの名前は？」

「人に名を尋ねる時は自分から名乗るものよ！」

（・・・チッ）

声に出すとまたうるさいので心のなかで舌うちをして答えた。

「俺はアレン。」

「！アナタが・・・。私はルナ。ルナ＝ヴァーミストよ。」

「ふ～ん。」

アレンはルナの反応が気になったがそのまま歩き続けた。

†††††

「ただいま～。」
「お邪魔します。」
「おかえり。あら？お客様かしら？」

顔を出したのは２０歳ぐらいの女性。

「ただいま姉さん。」

彼女はアレンの姉であるリリィ＝リーヴェルトである。

「可愛いお客様ね。アレンの彼女？」
「違ぇよ！」
「歳はおいくつかしら？」
「知らねえよ！さっき会ったばっかりなんだから。」
「まあ！今日あったばかりなんて・・・。手が早いわねぇ。」
「だから違うって！！！」

アレンがイライラしているとルナは自己紹介をはじめた。

「初めましてお姉さま。私はルナ＝ヴァーミスト、歳は１６になります。」「あら、どうもご丁寧に。私はアレンの姉のリリィよ。ゆっくりして行ってね。」
「はい！」

「ハア。」

アレンは、すっかり仲良くなったルナと姉を見ながら深く溜め息をついた。

†††††

あれからアレンはルナが倒れていたこと、勝手についてきたことをリリィに説明し、二階の部屋で横になっていた。

「ふう、なんか疲れた。」

アレンは呟いた。

（アイツ一体どこから来たんだろう）

この村の人はみな黒眼黒髪である。しかしルナは明るい茶髪で蒼い眼をしている。ルナがこの村の人でないことは一目瞭然だった。

（まあいいや。俺には関係無い。）

-関係無い-

この時まではそう思っていた。

†††††

リリィはルナを大層気に入り、一晩泊めることになった。

翌朝、アレンは珍しく早く起きた。

（今何時かな・・・）

時刻は４：３５。

（まだ寝れるな・・・）

そう思ってベッドに戻った時、

-ドォォォォン-

村の中心の方から爆音が轟いた。

「な、何だ！！！」

一階におりるとリリィも眼をさましていた。

「アレン！」

「姉さん！俺、村の様子を見てくるよ！」

「そんなことよりルナちゃんがいないのよ！」

「何だって！？」

「さっき眼をさましたらいなかったのよ！」

「じゃあついでにルナも探してくるよ！」

アレンはそういって玄関に駆けていった。アレンが靴を履いていると、

「待って！」

リリィが何かを持ってきた。

「もしものためにこれを持っていきなさい！」

手渡されたそれは一本の剣だった。

「なんで家にこんなものが・・・まあいいやありがとう。」

そういってアレンは村の中心部へと駆け出した。

†††††

村の中心部についたアレンは自分の眼を疑った。

「何だよこれ・・・」

「キャアァァ！」

「早くこの村から逃げるんだ！」

「なんでこんな村に！」

「兵士はまだか！」

「もうやられちまったよ！」

燃え盛る村から逃げる人々。炎の中に見える黒い影。

「あ、悪魔・・・。」

アレンは炎の中に悪魔の群れを見た。

第二話　崩れた日常（後書き）

第二話、読んでいただいてありがとうございます。ようやく悪魔出てきました。次はバトルになると思われます。良かったら読んでやってください。

第三話　不思議な感覚

揺らめく炎。燃え落ちる村。アレンはその中で立ち尽くしていた。

「何してんのよ！」

アレンは突然手を引っ張られた。

「うわぁ！」

悪魔しか眼に入っていなかったアレンは驚いた。

「しっかりしなさいよ！」

「ルナ！」

手を引いたのはルナだった。

「お前！どこ行ってたんだよ！」

「そんなことより！早く逃げないと殺されるわよ！」

「分かってるよ！」

アレンはさっきのことを考えていた。足がすくんで動けなかった訳ではない。ただ、

〝この剣を抜いて悪魔と戦わなくては〟

と思っていた。その事しか頭に無かった。

（何考えてんだよ俺）

「うわあぁぁ！」

アレンは悲鳴で我に返った。悲鳴のした方を向くと少年が悪魔に襲われていた。

「カイル！」

「！」

アレンは走り出していた。

「やめなさい！」

もはやルナの声は聞こえていなかった。

オーガ型の悪魔の鋭い爪がカイルに向かって振り下ろされようとしていた。

「危ねえ！！！」

間一髪、呆然としていた親友に飛び付いてかわした。

「カイル！しっかりしろ！」

「ア、アレン・・・」

「おい、大丈夫かよ！」

「！！！後ろ！」

血のように紅い眼が二人を見ていた。再び悪魔の爪が迫る。

（やられる！）

そう思った瞬間、

-ガキィィン-

見えない壁が二人を守った。

（ま、魔法か？一体誰が・・・）

アレンの耳に呪文を詠唱する声が聞こえた。

（ルナ！アイツ魔導士だったのか！）

「聖なる光よ、今ここに邪を貫く剣と成れ！」

悪魔の周りに光が集まり無数の剣を造った。

「一　ホーリーソード　一」

無数の剣は一斉に悪魔を貫いた。

「グォォ」

オーガ型の悪魔はうめき声を上げながら倒れた。

「「すげぇ・・・」」

二人が関心していると、

「早く逃げなさい！」

ルナの声が聞こえた。今の騒ぎで他の悪魔が集まって来ていた。ルナは悪魔の方にむけて呪文を唱え始めた。

「やべぇ！逃げるぞ！」

「・・・わりぃ。カイル、お前だけ逃げてくれ。」

「なっ、何言ってんだよ！」

アレンはルナと悪魔の所へ走った。

（馬鹿な事を言ってるのは分かってるよ。でも・・・）

アレンの中で何かが叫んでいた。‐戦え！‐と。

†††††

「多過ぎるのよ！」

ルナは愚痴った。

「揺らめく炎よ、焔と成りて邪を焦がせ！―　フレア　―！」

巨大な火柱が5、6体の悪魔を呑み込んだ。

（くっ、これ全部となると魔力が持たないわね・・・）

「ルナ！」

「！」

「大丈夫か！」

「馬鹿！何で逃げなかったのよ！」

「うるさいな！俺の勝手だ！お前だってこのままじゃ魔力が持たな

いだろ！」
「！うるさい！まだまだイケるわよ！」
「それだけ元気なら大丈夫だな。お前は飛んでるヤツを片付けてくれ。」
「他のはどうすんのよ！」
「俺がやる！」
「そんなの無理よ！」

アレンは、なぜこんなに自信があるのか分からなかった。剣を持つのも初めてである。しかし自分の中の何かが言っていた。

「無理じゃない！」

アレンは悪魔に向かって走った。剣の柄に手をかけると剣の振りかたや身のこなしを知っているような感覚がした。その感覚のままにアレンは剣を引き抜いた。

「はあぁぁああ！」

金色の閃きが眼の前の悪魔を一刀両断した。

「すげぇ・・・」

アレンは、この時初めて剣を眺めた。蒼い柄に銀の装飾、刀身は金色でアレンには読めない文字が刻まれていた。

「！」

剣に魅了されていたアレンに悪魔が迫っていた。

「チッ！」

アレンは避けながら斬り臥せた。そして地上の悪魔を次々に倒していった。

「すごい・・・」

アレンの様子を見ていたルナは上空の悪魔を魔法で打ち落としながら呟いた。

（それにあの剣。やっぱりアレンが剣聖アランの・・・）

二人は悪魔を倒し続けた。

†††††

「お前で最後だ！」

アレンは最後の一体を斬り臥せた。

「はぁはぁ、終わった。」

アレンが言った。

「あ、あれだけ、いたの、ぜ、全部倒したのね。」

ルナは悪魔を倒した後、炎の消火までしたので息を切らしていた。

「・・・」

「・・・どうしたのよ。」

浮かない顔をしているアレンに、ルナが尋ねた。

「俺、何でこんなことできたのかなって思ってさ。」

「それは多分・・・」

「！何だよ！何か知ってんのか！？」

「アナタの家で話すわ。リリィさんに聞かないと分からない事もあるし・・・」

「姉さんに？」

「そう。だから早く帰るわよ。」

「んだよ、勝手だな！」

「うるさいわね！さっさと帰るわよ！きっとリリィさん心配してるわ！」

そう言うと、ルナはスタスタと歩き出した。

（何であんな元気なんだよ）

アレンは少し関心しながらルナを追い掛けた。

第三話　不思議な感覚（後書き）

第三話を読んでいただきありがとうございます。今回はバトルでした。アレンがなぜ戦えたかは次の話です。次の話もお付きあい下されば幸いです。

第四話　真実　1

「ルナちゃん！」

家に帰るとリリィが心配そうに駆け寄ってきた。

「大丈夫！？怪我してるじゃない！」

ルナの腕にはさっきの戦闘でついたであろう切傷があった。

「これくらい平気。」

リリィはそう言ったルナの腕を掴んだ。

「イタッ！」

「やっぱり痛いんじゃない！無理しないの！」

「・・・うん。ごめんなさい。」

「包帯取ってくるからちょっと待っててね。」

「うん。」

（姉さんにはヤケに素直だな）

二人のやりとりを見ていたアレンは思った。

「アンタもよ！」

「！」

二階に上がろうとしていたアレンにリリィがしっかりと釘をさした。

†††††

「これでよし！」

アレンとリリィの処置を終えたリリィはポンと手を叩いた。

「アレンは大丈夫ね。ルナちゃんの傷は思ったより深いわ。病院で手当てしてもらった方がいいわね。アレン！連れていって頂戴。」

一段落したと思ったアレンは気になっていた事を聞いた。

「なぁ姉さん、あの剣の事だけど・・・」

「！もう少し、待ってくれないかしら・・・」

「姉さん！」

「・・・」

「リリィさん。私からもお願いします。」

「！」

ルナが口を挟んだ。

「アレンの事を考えるならちゃんと話すべきです。」

「！・・・」

「姉さん・・・」

「・・・そうよね。ちゃんと話すべきだわ。」

どうやらリリィは観念したらしい。

「だけど心の準備をさせて。アナタ達が病院から帰ってきたら話すから。」

「姉さん、ありがとう・・・」

「しょうがないわよ。いつかは言わなければならない事だもの・・・・
ほら！早く病院で診てもらってきなさい！」
「うん。」

二人は家を後にした。

†††††

一本道を歩きながらルナが言った。

「ねぇ、病院ってどこにあるの？もしかして・・・・」

村の外？と聞く前にアレンが答えた。

「あぁ、大丈夫。ちゃんとこの村にあるよ。」
「え、でも村は・・・・」

ルナは悲しい顔をした。

「それも大丈夫。家と同じで村外れにあるんだ。」
「良かった・・・・」

ルナは安堵の表情を浮かべた。

「そういやさ、なんで村は燃えてたんだ？」
「・・・・」
「火を出すヤツはいなかったよな？」
「・・・・」
「どうした？」

ルナの表情は固まっていた。それを見たアレンは気付いた。

「！まさか・・・」

「し、しょうがないでしょ！炎の魔法を使ったら火が着いちゃったの！」

「着いちゃったって・・・ぃ」

「う、うるさい！悪かったわよ！これでいいんでしょ！」

（ひ、開き直ったぃ）

どう育ったらこんな性格になるのだろうとアレンは思った。

†††††

二人は病院の前に来ていた

「・・・ここ？」

ルナはさっきの言い合いで不機嫌になったようだ。

「あぁ、この村にはここしか病院は無いんだ。」

アレン呼び鈴を押した。

「はーい。どうぞ・・・ってアレン！」

扉を開けたのはカイルだった。カイルはこの病院の医者夫婦の一人息子である。

「無事だったか！全く心配させやがって！」

「馬鹿！無事じゃねえから来たんだろ！痛えって！離れろ！」

アレンは抱きつくカイルを引き離した。

「！君は・・・」

カイルはようやくルナに気付いた。

「アレン・・・」

カイルが肩を組んできた。

「なんだよ？」

「親友の俺に相談も無しに彼女を作るなんてヒドいじゃないか。」

「はぁ？」

「あの娘はあの時助けてくれた娘だろ？いつの間に仲良くなったんだ？」

「馬鹿！違うっつーの！」

カイルは聞いていなかった。

「あの時はありがとう。」

「別に。」

「・・・」

少し気まずくなった雰囲気の中、アレンが口を開いた。

「お、親父さんはいるか？」

「あ、あぁ。でも今日は怪我人が多いから時間かかると思うぜ。中で待ってろよ。」

中に入るときカイルが言った。

「・・・お前の彼女ウルトラクールだな。」

「だから彼女じゃねえって！」

玄関にアレンの声が響いた。

†††††

あれから3時間程待ち、ようやく診察を受けた二人は来た道を戻っていた。

「よかったな。大した事なくて。」

ルナの怪我は2、3日安静にしていれば大丈夫との事だった。

「なあ、ちょっと聞いてもいいか？」

「なに？」

「ルナは魔導士なのか？」

「一応ね。私は魔力が少ないから剣も学んだわ。」

「へぇ。魔剣士って事か。」

「そういう事になるわね。」

「もう一つ聞きたいんだけど、いいかな？」

「どうぞ。」

ルナはそっけなく言った。

「ルナはこの村の人間じゃないだろ？どこから来たんだ？」

「・・・アルテスタ。」

「アルテスタ！？それってまさか王都アルテスタか！？」

アルテスタはこの国の王族が住んでいる都市で、王国一広い。

「・・・そうよ。」

「すげぇ所に住んでんだな。俺も行ってみてえな～。」

ルナは悲しい顔をしていた。

「どうした？」

心配になったアレンは言った。

「・・・アルテスタはもう無いわ。」

「えっ？」

「この村には伝わって無いみたいだけど、世界では今、人と悪魔の戦争が起こっているの・・・」

「人と、悪魔の戦争？」

アレンは信じられなかった。この村は戦争が起こっているなんてことを感じさせない程に平和だった。

「そうよ。アルテスタは悪魔の襲撃を受けて・・・王族は皆殺しになったのよ。指導者がいなくなった今、悪魔に抵抗する者もほとんどいなくなったわ。」

「・・・」

それから二人は一言も口にせず歩いた。

†††††

「ただいま。」
「おかえり。どうだった？」
家に帰るとリリィが心配そうに駆け寄って来た。
「あぁ、全然平気だっ
「アンタじゃなくてルナちゃんよ！」
アレンの返事を遮ってルナに聞いた。
「ルナちゃん、お医者様はなんて？」
「大丈夫です。あと2、3日安静にしてれば良くなるそうです。」
「そう、よかったわ・・・」
「姉さん・・・」
「わかってる。聞きたいんでしょ？あの剣の事も・・・アナタ自身の事も。」
アレンはゆっくり頷いた。
「・・・あの日もこんな空だったわ。雲一つない青空。」リリィは窓の外を見ながら語り始めた。

第五話　真実　2

-１５年前-

「ただいま～！」

「おかえりなさい。」

６歳のリリィを出迎えたのは優しそうな女性。

「お母さん！」

女性の名はジュリア＝リーヴェルト。リリィの母である。

「今日ね、歴史のテストで１００点とったよ！」

リリィは得意気にテスト用紙を見せた。

「あら！頑張ったじゃない！」

ジュリアは優しそうに笑った。

「もうこんな時間！晩御飯にしましょうか。」

「今日のご飯はなぁに？」「今日はハンバーグよ。」

「わーい！お母さんのハンバーグ大好き～！」

二人は食事の準備をしだした。

†††††

「ごちそうさま。」

リリィは夕食を食べ終えた。

「あらあら、口のまわりが汚れてるわよ。」

ジュリアは微笑みながらリリィの口まわりを拭き、時計を見た。

「お父さん遅いわねぇ。」

リリィの父、セイル＝リーヴェルトはいつも夕食時には帰ってくる。

「お仕事で何かあったのかしら・・・」

セイルは村の警備の仕事をしている。

「さあ、リリィはもう寝なさい。」

「やだ！リリィもお父さん待ってる！」

「明日学校が休みだからって夜更かししちゃダメよ。」

「やだやだ！リリィも一緒にお父さん待つの～！」

「しょうがないわね～。じゃあお母さんと一緒に待とうか。」

「うん！」

リリィはジュリアに抱きついた。

†††††

「・・・やっぱり寝ちゃったわね。」

あれから2時間後リリィはジュリアに抱かれながら寝息をたててい

た。

（それにしても遅いわねぇ）

ジュリアがそんな事を考えている時、

―ガラガラガラ・・・―

玄関から戸を開ける音が聞こえてきた。

「お～い！ジュリア！ちょっと来てくれ！」

響いたのはセイルの声だった。

「はいはい。ちょっと待って下さい！」

セイルの声に普段とは違うものを感じたジュリアは急いでリリィを二階のベッドに寝かせ、玄関へと走った。

「あなた！その血・・・！」

セイルの服には所々に血が染みていた。

「違う違う！俺の血じゃない！それより彼女だ！」

セイルの後ろには傷だらけの女性がいた。女性は細長い包みと赤ちゃんを抱えていた。

「わ、私の事より、この子を・・・」

女性は赤ちゃんを差し出した。

「馬鹿言ってないで二人とも上がりなさい！」

「でも、いいのですか？こんな誰かもわからない者を家に上げて・・・」

「怪我人が余計な気を使うものじゃない！いいから上がりなさい！」

「・・・ありがとうございます。」

「さあ、怪我人はこっちへいらっしゃい！」

ジュリアはいつのまにか救急箱を抱えていた。セイルが女性を説得している時に取ってきたようだ。

女性は深くお辞儀をすると小さく

「お邪魔します・・・」

と呟くと家に上がった。

†††††

セイルの話によると、仕事が終わって帰る所にこの女性が現れ、赤ん坊を預かって欲しいと頼まれたそうだ。しかしセイルは傷だらけの女性を放っておけず、遠慮する女性を無理矢理引っ張ってきたらしい。

（本当にお人好しなんだから。でも、そんなとこに惚れたのよね～）

などと一人で考えている間に治療が終わった。ジュリアは看護師だったので応急処置はお手の物である。

「これでよし！」

処置を終え、道具を片付けながらジュリアは聞いた。
「さて、何があったか話してくれないかしら？」
「・・・」
女性は口を開こうとしない。
「お節介でしょ？家は二人ともお人好しなのよ。だからかわからないけど子供を甘やかしちゃって最近益々わがままに・・・」
「お子さんがいるんですか？」
女性が口を開いた。
「ええ。娘が一人。あの子はあなたの子供？」
今はセイルがあやしている赤ん坊を見ながらいった。
「はい。」
「男の子？女の子？」
「男の子です。今年で1歳になります。」
「あらそう。親っていろいろ大変でしょ？」
「はい。」
「でもね、親が辛い顔すると子供も辛くなるのよ。あの子のためにも何があったか話してくれないかしら？」
女性は一生懸命赤ん坊をあやしているセイルとジッと見つめてくるジュリアを見て言った。
「・・・本当にあなた達はお人好しです。」

女性は初めて笑顔を見せた。

「ふふっ。ありがと！」

女性は話し始めた。

「・・・そういえば、まだ名を名乗ってませんでしたね。私の名はウェルテス、姓は・・・ごめんなさい。言えません。」

「言えないって・・・」

「待て。」

どういう事？そう聞こうとしたジュリアをセイルが止めた。

「何か事情があるのだろう？」

「はい、すみません・・・」

「いいからいいから、続きを聞かせてくれ。」

「はい。私は王都アルテスタに住んでいました。」

「「アルテスタに！？」」

セイルとジュリアが声を揃えた。

「はい。アルテスタは大きく、豊かな都ですが、悪魔の襲撃が絶えないんです。」

「なぜ・・・」

「わかりません。一説には王の血筋を絶つためだといわれています。」

この時セイルはウェルテスの眼が逸れた事に気付いたがあえて何も言わなかった。

「今から一ヶ月程前、アルテスタは悪魔に襲われました。家は壊され、人々が殺されていきました。私はこの子を抱えて必死で逃げました。走って走って走り続けて、逃げ続けました。そうやってアテもなく世界をさまよっているうちにこの村へ・・・父も母も親戚も皆、殺されました。共に逃げた夫は途中で悪魔に襲われた時に・・・」

ウェルテスの眼から涙がこぼれた。

「ご、めん、なさい。」

ウェルテスはおえつを噛み殺しながら言った。

「馬鹿ね・・・泣いていいのよ。泣いてスッキリしたほうがいいわ。」

ジュリアが優しく言った。

「うぅ、うっ、うぁあぁぁぁ」

しばらくウェルテスは泣き続けた。

†††††

「どう？スッキリした？」

「はい。」

「大変だったわね。」

「・・・はい。」

「・・・その体の傷は悪魔に襲われた時に？」

「はい。」
「でもその傷は最近のものよね？よく逃げられたわね。」
ウェルテスの体にはまだ新しい傷もたくさんあった。
「私は剣術を少々学んでいます。ある程度の悪魔なら私一人でも大丈夫です。」
「本当！？凄いわ～！」
「ほ～！そりゃ立派なもんだ。」
ジュリアとセイルは感心した。その時、
「お父さん？帰ってきたの？」
リリィが起きてきた。気付けば夜が明けていた。
「ただいま。ごめんな、起こしちゃったか？」
「だれ～。お客様？」
リリィはウェルテスを見ながら聞いた。
「こ、こんばんは。」
「お名前は～？」
「ウェルテスよ。」
「私はリリィ～。」
「そう、リリィちゃんか～。」
ジュリアはウェルテスが笑顔になっていることに気付いた。
「あ～赤ちゃんだ～！かわいい～！お名前は何て言うの？」
「その子はアレンって言うのよ。」

「アレンか～じゃあ男の子だね！」
「そうよ。まだ1歳なの。」
「ねえ！お姉ちゃんとアレンくんはいつまで家にいるの？」
「えっ？」
ウェルテスは言葉を詰まらせた。
（すぐに出ていくつもりだったわね）
ジュリアは気付いた。そして言った。
「ウェルテスさん。傷が癒えるまでここに止まっていかない？」
「えっ！？」
ウェルテスは驚いた顔をした。
「リリィもなついちゃったし。」
「でもっ！また悪魔に襲われたら、みんなを巻き込んでしまったら・・・」
リリィはうつ向いた。
「ありがとう、ジュリアさん。だけど・・・あいた！」
ジュリアはウェルテスのオデコを軽くこづいた。
「大丈夫よ。うちの人強いから！きっと守ってくれるわ。ねえ？」
ジュリアはセイルを見た。

「おう。君もたまには気を抜かないとしんどいだろ？」

その言葉を聞いたウェルテスの眼に涙が溢れた。

「本当に・・・あなた達はお人好し過ぎます。」

話についていけないリリィはあわてている。

「なんでおお姉ちゃん泣いてるの？どこか痛いの？」

ウェルテスはそんなリリィを抱きしめた。

「大丈夫、大丈夫よ。お姉ちゃん達もう少しここにいるけどいいかな？」

「うん！」

リリィは嬉しそうに笑った。

第五話　真実　2（後書き）

ちょいと過去編です。次でアレンの事がいろいろわかります（予定）。次話も付き合っていただければ幸いです。

第六話　真実　3

ウェルテスがリーヴェルト家に滞在してから一週間が過ぎた。

「ただいま～ウェルお姉ちゃん！遊ぼう！」

「あら、リリィちゃんおかえり。」

リリィはすっかりウェルテスになついている。

「こら、リリィ！ウェルは怪我してるのよ！それに帰ってきたら手を洗う！」

「はぁ～い。」

リリィは渋々洗面所に向かった。

「まったく！ごめんなさいねぇ、毎日毎日。」

「いえ、いいんですよ。子供は好きなんです。」

ウェルテスは微笑んでいる。

（よく笑うようになったわ～リリィのおかげかしら）

ジュリアも思わず微笑んだ。

†††††

「ウェル！買い物に付き合ってくれないかしら。」

ジュリアはウェルテスを買い物に誘った。

「いいですよ。あっ、でもアレンが・・・」
「行ってきていいよ～。」
リリィが言った。
「私がアレンを見てるから。」
リリィはアレンをすっかり気に入り、弟のように思っていた。アレンもリリィになついているようで今やウェルテスよりもリリィが世話しているほうが機嫌がいいほどだった。
「それじゃあ・・・お願いしようかしら。」
「うん。リリィはアレンのお姉ちゃんだから！行ってらっしゃい。」
ジュリアとウェルテスは微笑んだ。
†††††
「リリィちゃんは本当にいい子ですね。」
買い物の帰り道、ウェルテスは言った。
「そんなことないわよ。ああなったのはあなた達が来てからよ。」
ジュリアは答えた。
「ねぇ、ウェル。良かったら、ずっとここにいない？」
「・・・ありがとうございます。でも・・・」
「やっぱり、行っちゃうのよね・・・」

「・・・はい。」
「そうだと思ったわ。・・・あなたは変わったわね。」
「えっ？」
「会った頃は、って言っても一週間しかたってないけど、なにも話したがらなかったわ。」「そうですね・・・でも、それはきっと・・・」
「？」
「あなた達が変えてくれたんですよ！ジュリアさんとセイルさん、そしてリリィちゃんが変えてくれたんです。」
「て、照れるじゃない！」
「ふふっ、照れて下さい。」

ジュリアとウェルテスは夕焼けの中を歩いていった。

†††††

その夜、ウェルテスはみんなを集めた。

「さて、話って何だい？」

セイルが聞いた。

「はい、実は・・・明日ここを出ていこうと思います。」
「ダメ！」

リリィが叫んだ。

「嫌だ！お姉ちゃん達はずっとずっとず～っと、ここにいるの！」
「・・・リリィ、ウェルの話を聞いてあげなさい。」

ジュリアが言った。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ～！」

「リリィ！」

「うっ、お母さんのバカ～！」

リリィは二階に走っていった。

「ごめんなさいね・・・」

「いえ・・・」

「それで、怪我のほうはどうなんだい？」

セイルが話を戻した。

「おかげ様で傷はほとんどなくなりました。もう動けます。これもジュリアさんのおかげです。」

「そう・・・よかったわ。」

「それで・・・」

ウェルテスは言いにくそうな顔をしたが、すぐに切り出した。

「アレンを預かってもらえないでしょうか？」

「えっ！」

ジュリアは思わず声をもらした。

「一体なぜ？」

セイルも不思議そうに聞いた。

「それには私達の事を話さないといけませんね・・・私の名はウェルテス＝リンドバーグ。」
「リンドバーグだと！？それはまさか・・・」
セイルは驚いた。
「そう、剣聖の・・・アラン＝リンドバーグの血を引く一族です。」
「・・・」
ウェルテスは驚いて声も出ない二人をよそに話を続けた。
「・・・アルテスタが悪魔に狙われているのは、王族がいるからだけではありません。私達が、剣聖の血を引く一族がいるからです。」
ウェルテスはそこまで話すと、一旦話を切った。
「そうだったのか・・・」
やっと頭が追い付いてきたセイルが言った。
「でもそれがアレンを預かる事とどう関係があるんだ？」
「・・・この子は、大変な運命を背負っています。この子は・・・剣聖の生まれ変わりなんです。」
「そんな馬鹿な！生まれ変わりだと？大体生まれ変わるなんてことが出来るのか？」
「・・・魔法です。」
「魔法！？」
「はい。剣聖と共に戦った大魔導士ユアンが死後の世界の王と契約し、１０００年後に二人の記憶を引き継いだんです。」

セイルはアレンを見ながら言った。

「じゃあ、この子は剣聖アランなのか？」

「いいえ、違います。」

「どういうことだ？この子は生まれ変わりなんだろ？」

「記憶を引き継いだといっても、戦闘に関する記憶だけです。あの大魔導士ユアンでも、自分達の魂をそのまま後世に移すことは出来なかったんです。」

「なるほど・・・」

ジュリアはある事に気付いた。

「でも、どうしてアレンを預かるの？」

そう聞かれると、ウェルテスは母親の顔をして答えた。

「この子は時が来れば、戦いに身を投じるでしょう。でも、せめてそれまでは、普通の暮らしをさせてあげたい。私は悪魔に狙われている、だからこの子と一緒にはいられない。」

「そんな・・・」

「あなた達ならアレンを安心して任せられる、そう思ったんです。」

「・・・」

「アレンをお願いします。」

二人はしばらく黙っていたが、セイルが口を開いた。

「わかった。アレンは責任を持って預かろう。」

「あなた！」

「ジュリア、ウェルテスは私達を信じてくれたんだ。私達はそれに

答えなければならないよ。」
「・・・そうね。わかったわ。アレンは家で預かる。」
「ありがとうございます！」
ウェルテスは二人にお礼を言った。

†††††

「リリィちゃんにお別れを言ってきます。」
翌朝、目覚めたウェルテスはアレンを抱いて二階にあがった。
「リリィちゃん。」
「・・・」
呼び掛けたが返事はない。
（寝てるのかしら）
「リリィちゃん、入るね。」
ウェルテスはドアを開けた。
「リリィちゃん・・・」
リリィは起きていた。一晩中泣いていたのか、眼は真っ赤に充血していた。
「・・・やっぱり行っちゃうの？」
「・・・うん。だからね、リリィちゃんが私を忘れないように、リ

リィちゃんに頼みたい事があるの。」
「頼みたい事？」
「うん、あのね・・・アレンをリリィちゃんの弟にしてほしいの。」
「えっ？」
「この子が自分でここを出ていくまで、リリィちゃんがお姉ちゃんとしてこの子を叱ったり、褒めたりしてほしいの。そして、この子が自分の事を知りたいと思った時に本当の事を教えてあげて。」
「・・・」
「なってくれる？アレンのお姉ちゃんに・・・」
「・・・うん。リリィがアレンのお姉ちゃんになる！アレンが幸せに暮らせるように頑張る。だからね、だから・・・」
「？」
「絶対にまたここに帰って来て！」
「！・・・うん！帰って来るね・・・」

リリィはアレンを受け取って抱いた。

「泣かないよ！わ、私、アレンのお姉ちゃん、だから。」

リリィは涙を堪えながら言った。

「じゃあ私も泣くわけにはいかないね。私はリリィちゃんのお姉ちゃんだからね！」
「！お姉ちゃん・・・」

リリィは今にも泣き出しそうだ。

「それじゃ、そろそろ行かなきゃ・・・」
「約束だからね！絶対戻って来てね！」
「うん！また会いに来るね！」

そういうとウェルテスさリリィの部屋を出ていった。

†††††

ー現在ー

「これが私の知る限りのあなたについての話よ」

話終えたリリィはうっすらと涙を浮かべていた。

「この後は、わかるでしょ？」

「ああ。」

アレンは頷いた。

「父さんも母さんも、本当の親みたいだった。5年前に父さんと母さんが事故で死んでから、姉さんが働いて俺を育ててくれた・・・」

「約束したからね。あなたを幸せにするって！」

リリィは微笑んだ。

「姉さん・・・」

「あの～・・・」

しんみりした所にルナが声を掛けた。

「それでアレンが持ってる剣の事は・・・」

「あら、いけない。忘れるところだった！」

そういうとリリィは自分の部屋から手紙を取ってきた。

「これは？」

手紙を渡されたアレンは尋ねた。

「その剣に添えてあったのよ。中は私も読んでないわ。」

アレンは手紙を読んだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

アレンへ

アレン、あなたがこの手紙を読んでいるということは、リリィちゃんから自分の事を聞いたのでしょう。
この剣は剣聖が使っていた剣です。
１００年後の自分へ、つまりあなたに残すためにリンドバーグ家で保管されていた物です。
あなたの運命はとても重い。
だけど、負けないで。
あなたは剣聖の生まれ変わりだけど、アランではなくアレンです。
私の息子で、リリィちゃんの弟、あなたはアレンです。
それを忘れないで。

母より

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「母さん・・・」

「これは、やっぱり剣聖の剣だったのね。そしてやっぱりあなたが剣聖の血を引く者だった。それも生まれ変わり・・・」
「なあ、なんだよやっぱりって・・・」
「・・・私は剣聖の血を引く者がこの地にいるということを聞いてこの村に来たの。アレンという名前だということまで調べたわ。そしてあなたと会った・・・」
「・・・なあ、俺達会った事あるか？」
「？ないわよ。なんで？」
「いや、初めて会った時、なんか見たことあるような気がしたから・・・」
「・・・それは、多分、そっくりだからよ。ウェルテスさんに・・・初めて見た時は驚いたわ。」
「！？」
「似ていてもおかしくはないわ。」
「どういう・・・」
「リリィちゃん、あなたは何者なの？どうやってアレンの事を調べたの？」

ルナは一呼吸置いてから話し始めた。
「私の名はルナ＝アルテミス＝ヴァーミスト。このアルテミス王国の王位正当後継者よ。」

アレンとリリィは驚いて固まった。

「今、王位を継承出来るのは私だけ・・・王族は滅んだわ。」
「なんで！？」

アレンの問にルナは呆れながら答えた。

「あなたには言ったじゃない！王都は悪魔に襲撃されたって！」

「あっ・・・」
「もう！ちゃんと覚えてなさいよ！」
「それで、アレンの事は・・・」
真剣なリリィの問にルナは真剣に答えた。
「アルテスタ城の図書館に剣聖と大魔導士の事を詳しく調べて記録してある本があったわ。もちろん禁書の棚にね。その本に剣聖の一族について詳しく載っていたわ。それによるとウェルテス＝リンドバーグは旧姓ウェルテス＝アルテミス＝ヴァーミスト・・・つまり、王族だったの。私にとって叔母の関係に当たるわ。似ていたとしてもおかしくはない。その本にはアレン、あなたの事も記してあったわ、事細かに。」
「何でそんな本があるんだよ。」
「わからないわ。」
「ルナちゃん、大体の事はわかったわ。でもなぜアレンに会いに来たの？」
そう聞かれたルナは真剣な眼をして言った。
「この世界を救うためです。」
「？」
「この荒れた世界を再び平和にするために、剣聖の力が必要なの。」
「どういうことだよ！」
自分の事になったのでアレンも真剣になった。
「１０００年前、悪魔王は死んだわけではないの。二人の力を持ってしても封印することで精一杯だったのよ。」
「まさか、悪魔が増え始めたのは・・・」
「そう、悪魔王の封印が解けかかっているのよ。剣聖と大魔導士は

誓いをたてたわ。封印が解かれる時に生まれ変わり、もう一度出会い、今度こそ悪魔王を倒すと。」

話に着いていけなくなったアレンとリリィは呆然としていた。しかし、ルナの次の一言で正気に戻された。

「だから、アレンには一緒に来てほしい。」

「！」

「あなたの力が必要なの。」

「話はわかった。けど心が着いてこないよ！なんで俺なんだよ！なんでルナは世界を救いたいんだよ！」

アレンは突然、自分にのしかかってきた運命に押し潰されそうだった。

「・・・私はこの世界が、人間が好きなの。いい人もわるい人も。今、世界が荒れて沢山の人が困っているわ。私は困っている人を、世界を助けてあげたい。だれもが笑える国を造りたい。」

「・・・・」

「・・・だって、私は王だから！」

「！」

アレンは関心した。

（なんて強くて優しい想いだろう）

ルナは照れたのか頬を赤くしている。

（王、か・・・こいつも辛い運命を背負ってるのに・・・それに負けないで戦ってる。それに比べて俺は・・・）

少しの間、沈黙が流れた。

「・・・俺は甘えてたよ。自分の運命を知りながらまだ関係ないと思ってた。でも決めた！俺はルナに着いて行くよ。必ずルナをこの世界の王にする！・・・こんな俺だけど、連れてってくれるかい？」

「アレン！」

「ごめん、姉さん。俺、もう決めたんだ。この世界を救う！」

「・・・私には、止める権利は無いわ。ウェルテスさんも言ってたもの、この子がここを出ていくまで、ってね。」

「リリィさん・・・」

「いいのよルナちゃん。アレンを連れていってあげて！」

「・・・はい！」

「だけど、二人とも、約束してね。必ずここに戻って来て！世界が平和になるまで、ずっと待ってるから。」

リリィは眼に涙を溜めている。

「当たり前だろ！例え血が繋がってなくたって、姉さんは俺の姉さんだよ！俺の帰る場所はここにしか無いから、必ず戻ってくる！」

アレンは血は繋がらなくとも、本物の姉に誓った。

- 必ず戻ってくる -

と。

第六話　真実　3（後書き）

今回でアレンとルナの事がわかりました。次回は旅立ちです。このあとどうなるんだろ（予定無し）まあなるようになります！次回も付き合っていただければ幸いです。

第七話　旅立ち

次の朝、アレンとルナは旅の準備をするため、村の中心部に来ていた。ライラ村は緑豊かで森に囲まれているが、中心部はそこそこに賑わっている。

「これ下さい。」

ルナは保存のきく食品を買いあさっていた。

（こんなに食うのか？）

アレンはその様子をみて思った。

「どうしたの？」

アレンの様子を不思議に思ったルナが聞いた。

「あっ、いやなんでもない。」

「？まあいいけど。」

食品を買い終わると、次の店へと向かった。

「この村の武器屋はどこにあるの？」

「ああ、こっち。」

そう言うとアレンは武器屋に向かって歩き出した。

「・・・この村の人達はたくましいわね。もう元気に働いてる。」

「そうだな。まあ、そこがこの村のいい所さ。」
「そうね。」

二人は歩いて行く。

†††††

「ここだ。」

二人は武器屋に着いた。武器屋は商店街の端にある。

「いらっしゃい！ん？アレンじゃねえか！」
「おじさん、久しぶり。」
「おう、まったくだ。5年前にセイルに連れられて来たとき以来だな。」
「ああ、そうだね。」
「それで、今日は何しに来たんだ？」
「剣を買いに来たんだ。」
「剣を？」
「うん、軽くて扱いやすいヤツがいいんだけど・・・」
「いいのがあるぜ！ところで、なんで剣がいるんだ？おめえも親父みたいに傭兵になんのか？」
「違うよ。ちょっと旅に出るんだ。それに俺の剣じゃなくて彼女の剣なんだけど・・・」

店の親父はようやくルナに気付いた。

「なんだ、アレン。おめえのガールフレンドか？」
「違う！」
「な～に、そんなに照れることねえだろ！」

「・・・」

アレンはもう何も言わなかった。

「さて、お嬢ちゃん、どれくらい剣を扱えるんだい？」

「剣術を学んで１０年ぐらいですけど・・・」

（きっと王族だから英才教育を受けたんだろうな、剣聖の一族とも繋がりがあるみたいだし）

アレンは思った。

「ほう、そいつはすげえ。じゃあちょっとこいつを斬ってみてくれ。」

そう言うと親父は太い丸太と一般的な剣を取り出した。

「これを斬ればいいんですか？」

ルナは平然と言った。

「ああ、やってみてくれ。」

そう言われたルナは剣を手に取り鞘から引き抜いた。そして、丸太に向かって振った。刃先は綺麗に弧を描き、再び鞘に納められた。

「こいつは見事な腕前だ！」

丸太は斜めに斬られていた。

「これなら、ちっとばかしクセのあるこいつも扱えるだろ。」

親父は店の奥から剣を一振り持ってきた。

「どうだ？」

「凄く扱いやすいです！」

「そりゃよかった。」

その剣は刀身が短めで細く、無駄な装飾がほとんど無かった。

「お嬢ちゃんは魔剣士だろ？」

「！なんでわかったんですか？」

「この商売長いからな。」

親父は自慢げに言った。

「そいつは魔力で鍛えられている。持ち主が魔力を注げば、なんか変化があるはずた。」

「なんかって・・・ι」

親父のいいようにアレンは思わず呟いた。

「しょうがねえだろ！俺は魔力ねえんだから！」

「いいんです。これから自分で調べますから。」

「お嬢ちゃんは優しいねぇ～。」

そんなこんなで二人は店をでようとした。

「まちな！」

それを親父が引き止めた。

「アレン、選別だこいつを持ってけ！」
そう言うと親父は剣を一振り投げ渡した。
「うわっと！あぶねえな・・・これって！」
アレンは驚いた。
「そうだ。そいつはおめえの父親の剣だ。」
それは細身で白銀の長剣だった。刀身に文字がほってあった。
―セイル＝リーヴェルト―
「・・・おじさん、サンキュー！」
「おう、気い付けていけよ。」
二人は店を後にした。
†††††
「もう買い物はすんだよな？」
「そうね。食べ物も買った、服も買った、武器も買ったし。」
「それにしてもあの剣高かったなぁ」
「ふふっ、ありがとっ！」
ルナは満面の笑みを浮かべている。
（ちくしょう、なんでルナのやつ金持ってねえんだよ）

ルナが買った物は全てアレンがお金を払っていた。

「これからどうすんだ？」

「私には用事は無いわ。あなた次第よ。」

「・・・じゃあ、明日の朝出発でいいかな？」

「なにするの？」

「皆にお別れを言ってこようかと思って・・・」

「そう・・・じゃあ私は家にいるわ。お別れを言ってらっしゃい。」

「うん、そうするよ。」

アレンはルナと別れて、一人村を歩いた。

†††††

アレンは学校に向かっていた。カイルに旅立つ事を話すと、学校に皆を集めてお別れ会をしよう、ということになった。

（しばらくはクラスの皆とも会えないのか・・・）

アレンはカイルに感謝していた。お別れ会をしようなんて自分からは言いにくかったからである。

「今日の主役が遅えぞ！」

学校につくとカイルが叫んだ。既に全員集まっていた。

「ごめん！」

アレンは走った。

「これで全員揃ったわね。じゃあお別れ会を始めましょう！」

担任のアリア先生が言った。

†††††

この時間だけ、アレンは旅立つ事や、自分の事を忘れて楽しんだ。

「もう日が暮れるな・・・」

カイルがそう言うと、皆静かになった。

「そろそろお開きだな。」

アレンの言葉に一気に場の空気が重くなった。

「・・・じゃあ、アレン。皆に一言、言ってちょうだい・・・」

アリア先生が言った。

「・・・みんな、」

この場にいる誰もが別れの空気を感じただろう。

「俺、ちょっとわけありで旅に出る事になったんだ。」

アレンは旅立つ理由を詳しくは言わなかった。

「この旅で、死ぬかもしれない。でも、ちゃんと帰ってくるから！」

そう言うとアレンは後ろを向いて歩き出した。

「ちゃんと帰ってこいよ！」

「待ってますよ。」

皆の声が聞こえた。アレンは振り返らずに左手を上げて歩いて行く。振り返ることが出来なかった。アレンの顔は涙でクシャクシャだったから。

†††††

「ただいま。」

「おかえり。」

家に帰るとリリィではなく、ルナが迎えた。

「ちゃんとお別れしてきた？」

「あぁ、ところで姉さんは？」

「それが、自分の部屋で何かやってるみたいで・・・」

「？何してんだろ？」

「あっ、夕食は？リリィさんが作ってくれてるけど・・・」

「食うよ。」

アレンは食卓に向かった。

†††††

その日リリィは結局部屋から出てこなかった。

「もう出発の時間なんだけどな・・・」

リリィはまだ出てこない。

「もうちょっと待つ？」

「・・・いや、いいよ。この気持ちが揺らぐ前に出発しよう。」

二人は玄関を出た。

「アレン！」

リリィの声が聞こえた。振り向くと、二階の窓からリリィが手を振っている。

「姉さん！」

「これ！」

そう言うとリリィは手に持っていた何かを投げた。

「うわっ！」

アレンはそれをキャッチした。それは手作りのブレスレットだった。

「姉さん、これ・・・」

「御守りよ！アレンがちゃんと帰ってこれるように！ルナちゃんにも！」

そう言うとリリィはもう一つ投げた。ルナはそれをキャッチした。

「・・・ペンダント？かわいい・・・」

ルナが受け取ったのは手作りのペンダントだった。リリィは大きく息を吸い込むと言った。

「いってらっしゃい！」

それを聞いたアレンは涙を溜めながら言った。

「行ってくる！」

アレンは旅立った。

第七話　旅立ち（後書き）

今回は旅立ちでした。次回からは冒険が始まります。仲間だったり敵だったり、いろんなキャラを構想中です。次回も付き合っていただければ幸いです。

第八話　前途多難

アレンとリリィは森の中を歩いていた。

「はぁ・・・」

アレンは溜め息をついた。

「今さら終わった事をグチグチ言わない！」

「そんなこと言ったって・・・」

それは２０分前の事、

ー２０分前ー

「なあ、そろそろじゃないか？」

「そうね、もうすぐ森を抜けるはずよ。」

ーガサガサー

「！」

現れたのは一人の男だった。

ードサッー

「お、おい！」

男は二人の目の前で倒れた。１８歳位に見える。青みがかった黒髪

で茶色の眼をしていた。顔はイケメンの部類に入るであろう。

「大丈夫か？」

アレンはすぐに駆け寄った。

「あぁ、ひ、人か、助かった。」

「どうした？何かあったのか？」

「実は、悪魔に襲われて・・・」

「悪魔がいたのか！？」

「はい・・・」

男は弱々しく答えた。

アレンは立ち上がり辺りを見回した。

「ルナ！どう思う？まだ近くにいると思うか？」

ルナも緊張して答えた。

「わからないわ！気を付けたほうがいいわね・・・！？アレン後ろ！」

「！？」

急いで振り返ったアレンの目に写ったのは・・・

「ありがとよ少年！じゃあな！」

走っていく男の姿。

「なんだ？もう元気になったのか？」
「馬鹿アレン！荷物盗られてるわよ！」
ルナは呆れながら叫んだ。
「えっ？あっ！」
アレンもようやく男が自分の荷物を抱えているのに気付いた。
「テメー！待ちやがれ！」
「追うわよ！」
二人は後を追った。しかし、追い付けずに今に至る。
「それにしても、あの野郎足速すぎだろ！追い付けるか！」
「あんたが盗られるからでしょ！」
「ご、ごめんなさい・・・」
アレンは冷静なルナの指摘に謝ることしか出来なかった。
「はぁ、もういいわよ。」
ルナは溜め息を漏らしながら答えた。しばらく二人の間に無言の時間が流れた。
†††††
「抜けた～！」
二人はようやく森を抜けた。辺りはすでに真っ暗である。

「そんなにはしゃがないでよ！みっともない！」
ルナの言いように少しムッとしながら言った。
「しょうがないだろ！俺、森を抜けたの初めてなんだ。今まで村から出たことなかったんだから。」
「そうなの？」
「あぁ、そう言えば、勢いで着いて来ちゃったけど、俺達どこに向かって旅してるんだ？」
「最終目標はアルテスタよ。」
「えっ、なんで？悪魔王を倒すんじゃないの？」
「・・・悪魔王を倒しても世界は荒れたままでしょ？」
「まあ、確かに悪魔王を倒したからってこの世界が平和になるわけでも無いな。」
アレンが頷いた。
「だからアルテスタに行って、私が王になって、この国を導くの！」
「へぇー。」
アレンは関心した。
（そこまで考えてたのか。確に、ただ悪魔王を倒せば終わるってもんでもないよな）
「最終目標はわかったよ。で、まずどこに行くんだ？」
「聖地に行きたいの。」
「リベリアに？」
「そうよ。リベリアは二人が誓いをたてた所だから・・・」
「剣聖と大魔導士の誓いか・・・」

「アレン、あなたが剣聖であるように、大魔導士の生まれ変わりもいると思うの。」
「いるな。確実に。」
アレンはなぜか大魔導士の生まれ変わりはいると確信した。
「聖地は約束の場所だから、なにか手掛りがあるかもしれない。」
「なるほどね、もう一人の生まれ変わりを探すのが第一目標って事か。」
「そういう事！」
「よっしゃ！それじゃ、急いで聖地リベリアに行こうぜ！」
「今日はここで休みましょう。」
アレンは思わずズッコケた。
「こんだけ盛り上げといて今日はここまで？」
「そうよ。」
「ここ、なんもないけど？」
「じゃあ野宿ね。」
ルナはさらりと言った。アレンの高ぶった感情はすぐに戻された。
†††††
二人は夕食の準備をしていた。近くに大きな木が生えていたのでその下で野宿をする事になった。
「しかし、便利だよな～、それ。」
「なに？」
「いや、魔法って便利そうだなって。」

魔法で火を起こしているルナを見ながらアレンは言った。
「魔法ね～。そんなに便利なもんでもないわよ？」
「えっ、なんで？」
ルナは鍋を火にかけると説明し始めた。
「まず、魔法っていつでもどこでも使えるみたいに思ってるでしょ？」
「違うの？」
「違うわ、魔法には元となる魔元素と呼ばれるものがあるの。例えば、火の魔法を使うには、火の魔元素が無いといけない。」
「どこにでもあるんじゃないの？」
「その場所によってある元素は濃いけど、他の元素は薄かったり、無かったりするの。」
「へぇー。じゃあ魔元素があれば魔法は使えるのか？」
「後は、魔力ね。魔力っていうのは魔元素を集めて形作る力の事なの。」
「じゃあ呪文は？何で呪文がいるんだ？」
「呪文はね、その詠唱に乗せて魔力を放出する事で、その魔法の属性と形を決めているの。」
「へぇー、色々あるんだな魔法にも。・・・なぁ
「アレンには無理よ。」
俺にも魔法って使えるかな？そう言おうとしたアレンの言葉を遮ってルナが言った。
「な、なんでだよ！」

ルナの次の一言でアレンの淡い希望は粉ごなに吹き飛ばされた。

「だってあなたには魔力が無いもの。」

「・・・」

アレンは反撃も出来なかった。

†††††

翌朝、アレンは一人早起きし、剣を握っていた。

（早く自由自在に扱えるようにならないとな・・・）

アレンには確に剣の握りかたから敵の斬りかた、足の運びかたまでわかっている。しかしわかっているだけだ。わかっているからその通りに動けるわけでもない。頭ではわかっていてもなかなか体が動いてくれないのも事実である。そんなわけでアレンは毎日剣を握って、動きを確認することにした。

「ふぅ〜、いい汗かいた！」

アレンが戻って来てもルナは起きていた。

「どこ行ってたのよ！」

帰ってくるなりルナが文句をいった。

「いや、ちょっと体を動かしに・・・」

「まったく！」

（うるさくないのは寝てる時だけだな・・・し）

アレンはそう思ったが心の中に留めた。

†††††

「近くにアイフリードって町があるから、そこに寄りましょう。食糧も買わないといけないから。」

ルナは溜め息をつきながら言った。

「そうだな。」

アレンが呑気に答えた。

「あんたが荷物盗られるからでしょうが！」

「ご、ごめんってば！」

怒ったルナにアレンはとりあえず謝った。

（まだ根にもってるし）

アレンはそう思ったが言わずに、あることを聞いた。

「あの～、ルナさん？」

「なによ？」

「お金もあの荷物の中にあったんですけど？」

「町に着いたらあなたが働いてお金を稼ぐのよ。」

「・・・はい？」

アレンは耳を疑った。

†††††

「私はホテルにいるから。後よろしく～！」

アイフリードに着き、ホテルにチェックインすると、ルナは冷たく言い放った。

（冷て～！そりゃあ荷物を盗られたのはおれですよ！だけどあの態度！ちきしょ～）

悪いのは自分なので何も言わずに仕事を探しに出た。

しばらく町をうろうろして適当な店に雇ってくれるよう頼んでみたが見事に玉砕した。

「くそ～、子供だと思って馬鹿にしやがって。」

愚痴をこぼしながらアレンは広場に向かっていた。と言うのも、最後に頼んだ店で広場に依頼掲示板があると教えてもらったからだ。

「えーと、あった！あれだ。」

アレンは掲示板に近付いた。

適当に貼り紙を見ていると、一枚の依頼が眼についた。

（悪魔退治の依頼か）

依頼の内容はこうだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

＝悪魔退治の依頼＝

村外れに悪魔が住み着いて困っています。
悪魔はオーガ型で、３体います。
誰か悪魔を退治してくれませんか？
腕に自信のある方ならどなたでも構いません。
悪魔を退治して下さった方にはお礼として１００万A差し上げます。
この依頼を受けてくれる方は１５日のＰＭ１０：００　に地図の場所まで来てください。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ひゃ、　１００万A（アルストル）」

お礼の金額を見たアレンは飛び付いた。A（アルストル）はこの国の通貨である。

(オーガ型ってライラ村を襲って来たやつだよな？しかも3体って、ヨユーじゃん！)

アレンはもう一度依頼を見た。

(１５日って今日だ！まさかこんなに早くお金が手に入るとは・・・)

アレンは浮かれながらホテルに帰った。

第八話　前途多難（後書き）

どうもぺたです。今回アレンはちょいとドジってしまいましたね。あの泥棒、あれだけ詳しく特徴を説明したので気付いた人もいると思いますが、また登場させるつもりです。一体いつになることやら（汗）次回は悪魔とのバトルの予定です。果たしてそう簡単にお金が手に入るのでしょうか？それでは次回も付き合っていただけると幸いです。

第九話　不気味な屋敷

アレンは時計を見た。

―ＰＭ９：０３―

（そろそろか・・・）

アレンは準備を始めた。

「なに？どこか行くの？」

アレンの様子を見ていたルナは聞いた。

「仕事だよ！し・ご・と！」

アレンはわざと嫌味に聞こえるように言った。二人の間に険悪なムードが流れる。

「そ、そう。」

ルナはアレンの態度に少しイラッとしたがここは押さえた。

「私・・・散歩に行ってくるから。」

「そうか。じゃあ気を付けろよ。」

「なんによ？」

何の考えも無しに気を付けろと言ったアレンはとりあえず言った。

「あ、悪魔とか？」

適当に言ったのでなぜか疑問形になっていた。

（あ～また適当な事言うなとか言われんだろーな・・・）

アレンの考えとは裏腹に、ルナはピクリと反応した。

「そ、そうね。気を付けるわ。」

そういうとルナは部屋から出て言った。

「？まあいいか！」

ルナの反応が気になったがそろそろ時間が来るのでアレンも部屋を出た。

†††††

時刻はＰＭ１０：１６。アレンは依頼主に詳しい説明を受けていた。

「・・・というわけなんですが、依頼を受けてくれますか？」

「任せて下さい。」

ルナが請け負った。

「・・・」

地図の場所に行くと、依頼主となぜかルナがいた。それから一緒に

説明を受け、今に至る。

「そちらの方は・・・」

「あ、はい。任せて下さい。」

「よかった。それじゃ私はこれで・・・」

依頼主は説明すると帰ってしまった。

「・・・」

「・・・」

お互いに沈黙。二人の間に重い空気が流れる。しばらくしてルナが口を開いた。

「なんでアレンがここにいるのよ！」

「いて悪いか！仕事って言っただろ？掲示板でこの依頼を見つけたから・・・ルナこそなんでここにいるんだ？」

「そ、それは・・・たまたまホテルでこの依頼の貼り紙を見掛けたから・・・悪魔が出て困ってるって書いてあったからほっとけなくて・・・そ、それに・・・」

ルナは言葉を濁した。

「それに？」

アレンは気になった。

「・・・荷物を盗られたのはアレンだけのせいじゃないのに、私、言い過ぎちゃったし・・・だからお金稼ぐの、ちょっと手伝ってあげようかなって・・・」

「・・・」

アレンは感激していた。

（なんだよ、なんだかんだ言っておきながら、優しいトコあるじゃん・・・）

「な、なによ！なんか言いなさいよ！」

「ありがとう。」

アレンは素直にお礼を言った。

「えっ？」

「だから、ありがとうって・・・」

「もういいわよ！」

ルナは顔を赤くしながら言った。お礼を言われる事には慣れていないようだ。

「ちゃっちゃと片付けるわよ！」

「はいはい。」

いつのまにか二人の間の険悪なムードは無くなっていた。

†††††

「悪魔が住み着いた、ってここか？」

二人は町ずれの屋敷の前に立っていた。とんでもなく広いが、かなり古く、見た目はボロボロのいかにも出そうな屋敷だ。

「そうみたいね。」

ルナが依頼主からもらった地図を見ながら言った。

「悪魔って屋敷に住み着くんだ・・・ι」

（なんでこんなとこに住み着くんだよι俺こういうのダメなのに・・・）

「もしかして、怖いの？」

アレンの表情を見ながらルナがからかうように聞いた。

「そ、そんなわけないだろ！」

「じゃあさっさと入りなさい！」

「うわぁ！」

後ろから突き飛ばされたアレンは転ぶように屋敷に入った。

「いった～！後ろから突き飛ばすか、普通！？」

「あんたがさっさと入らないからでしょ。」

ルナはさらりと言うと、スタスタと奥に歩いていく。

「・・・」

なんとなく、情けない気がしたアレンは黙ってルナに着いていった。

†††††

屋敷の中は見た目どうりに荒れていた。無駄に長い廊下をルナはスタスタ歩き、アレンは後ろからビクビクと着いていった。

「ほら、しゃんとしなさい！」

「だ、だって・・・ι」

（アレンってホラー系はダメなんだ）

ルナは心の中で笑いながら歩いた。

「ルナ！」

突然アレンが真面目な顔で言った。

「なに？どうし・・・きゃっ！」

アレンがルナに飛び付いた。二人が倒れこんだ瞬間二人の横の壁を何かが粉ごなに吹き飛ばた。その何かは紅い眼で二人を見ている。

「あ、悪魔！」

「走れ！」

二人は庭に出た。庭も屋敷同様かなり広かった。

「なんで悪魔が来るってわかったの！？」

ルナはアレンに聞いた。

「いや、なんか変な感じがして悪魔だって思って・・・」

「悪魔が近付くとわかるの！？」

「た、多分・・・」

ルナは驚いていた。そんな話は聞いた事がない。

（これも剣聖の力かしら？）

「！来るぞ！今度は二体だ！」

ルナが不思議がっているところに、アレンが叫んだ。

「！了解、一人一体ずつ潰すわよ！」

「おう！」

アレンは剣を引き抜いた。

「来たぞ！」

屋敷からオーガ型の悪魔が二体飛び出して来た。アレンは向かって来る悪魔を見ながら剣を二本静かに構えた。

「行くぞ！」

アレンは飛び出した。ルナも剣を抜いた。

（やっぱり実戦で試さないと。とりあえず火でいっか）

ルナは火の魔力を剣に込めた。

「！凄い・・・」

火の魔力を込められた剣は刀身が炎になっていた。

「はぁっ！」

迫ってくる悪魔に炎の剣を振った。炎が爆発的に大きくなり、悪魔を呑み込んだ。

「ガオォォォォォ！」

悪魔は悲鳴をあげながら燃え尽きた。

「この剣凄いわ・・・」

ルナがアレンの方を向くと、アレンも悪魔を倒したようで剣を鞘に納めていた。金と銀の刃が月の光で煌めいて、見とれる程に綺麗だった。

「二刀の扱い方もわかるみたいだ。」

「！」

ぼーっとしていたルナにアレンは言った。

「け、剣聖は二刀流だったのかしら？」

「？さぁ・・・」

「確か悪魔は三体だったはずよね？」「うん、そのはずだけど・・・！来る！」

「よくわかるわね。」

「なに落ち着いてんだよ！」

「だってあと一体ぐらい・・・」

どおって事ない。ルナはそう言おうとしたが現れた悪魔を見て声を失った。

「なっ！？」

アレンも驚いた。

「で、デカ過ぎだろ・・・」

オーガ型の悪魔というのはかなり大型である。先程の二体もアレン達の二倍ぐらいの大きさがある。しかし、窮屈そうに屋敷のドアをくぐってきたソイツはは、さっきの三倍程大きかった。

第九話　不気味な屋敷（後書き）

ようやく来た戦闘シーン！・・・なんかあっけなさ過ぎ感がしますね。こんなんでいいのかな？まあ、相手がまだまだ雑魚なんで（笑）次はでっかいヤツと戦うのかな？それではまた次回！

第十話　二人の約束

「くそっ！デカ過ぎだろ！」

アレンは目の前に現れた巨体に愚痴をこぼしながら距離をとった。

「はぁっ！」

ルナは逆に近付いて炎の刃を巨大なオーガの足めがけて振り下ろした。爆発的に燃える炎。しかし、

「なっ！？」

オーガの足は少しコゲめが付いただけで、ほとんどダメージがない。

「どんな皮膚してんのよ！」

オーガは足下のルナに向かって腕を振り下ろした。

「きゃっ！」

間一髪かわしたルナは急いで距離をとった。

「ルナ！大丈夫か！」

アレンが駆け寄って来た。

「平気。かすっただけ。」

ルナの肩から血が滲んでいる。

「今度は俺がやるからルナは魔法で援護してくれ！」

「アレと一人で戦う気！？」

「違うよ、ちゃんと援護を頼んだだろ！」

「！もしかして怪我したから！？私の怪我なんて気にしなくていいから！」

「気にするよ！」

「！？」

「ルナが怪我したら困るんだよ！」

「アレン・・・？」

「じゃあ、そういう事だから援護よろしく」

そういうとアレンは走り出した。

「はっ！」

銀色の刃を巨大な足に突きたてる。

「なっ、うそっ！？」

しかし巨大な足にはかすり傷ひとつ付いていない。

「ーフレアー！」

遠くからルナの声が響く。巨大な火柱がオーガの左腕を呑み込む。

しかし、ダメージは無い。

「なんて皮膚だよ！」

オーガは無傷の左腕を振り下ろした。その威力で地面が陥没した。

「冗談じゃねー！あんなの食らったら一発で死ぬって！」

そう呟きながら、動きが止まった左腕を金色の刃で斬りつけた。斬りつけられた部分に切傷が付いていた。

（！こっちの剣は刃がたつか・・・さすがは剣聖の剣だな・・・）

オーガは切傷を付けられた事に怒ったのか、今度は右腕を物凄い勢いで振り下ろした。その一撃で地面はまるで隕石が墜ちたようになっている。

「はぁっ！」

アレンは冷静にかわし、かわしざまに金色の剣で右腕を斬りつけた。

「こっちの剣じゃ、切傷ひとつ付けれないけど、これならどうだっ！」

アレンは金色の剣で付けた切傷に銀色の剣を深く突き刺した。

「どうだ！・・・ってうわぁ！」

オーガは剣を突き刺された痛みで右腕を振り回した。

「いって～！・・・あっ！」

オーガの右腕にはまだ銀色の剣が突き刺さったままである。

「父さんの剣持ってかれた！」

オーガはまだ右腕を振り回している。

「ーライトニングー！」

雷の魔法が振り回している右腕に、右腕に突き刺さった剣に墜ちた。

「グオオォォォォ！」

オーガは悲鳴をあげた。

「効いた！？・・・そうか！」

アレンが閃いたその一瞬のスキにオーガは左腕を横に振った。

「！やばっ・・・」

アレンはとっさに剣で受けたが受けきれるはずもなく吹き飛ばされた。

「がはっ！」

アレンの体は地面を転がる。

「大丈夫！？」

ルナが駆け寄る。

「なんとか・・・」

アレンはフラフラと立ち上がった。

「それよりさ、思い付いた事があるんだけど・・・」

そういうとアレンは作戦を説明した。

「どうだ？いけそうだろ？」

「そうだけど！あなたが危ないじゃない！」

「大丈夫だって！」

「だってフラフラじゃない！どうしてそんな無茶するの！？私が怪我したら困るってなに！？」

「・・・約束しただろ、ルナを王様にするって。王様は皆の前に出なくちゃならない、怪我してたらみっともないだろ？それに・・・俺が荷物盗られなきゃこんなことしてないわけだし・・・」

「・・・ふふっ、あはははっ！あー呆れた！あんたまだ荷物盗られた事気にしてたの？」

ルナは笑った。

「わ、笑うなよ！」

アレンが言った。

「・・・わかったわよ。そこまで言うならこれから私の事、無傷で守りなさいよ。王様が怪我してちゃ、みっともないでしょ？」

「・・・嘘つきは嫌いさ。」

「そのかわり約束して！・・・私を王にするまで、死んじゃダメよ。」

「！・・・当たり前だ！俺だってまだまだ死ぬ気は無いね！」

「約束よ。」
「あぁ！それじゃ、作戦通り頼むぜ！」
アレンは駆け出した。

第十話　二人の約束（後書き）

どうもぺたです。今回は短かったですね。なんかネタが思い付かなくて（汗）今回アレンが言ってた「作戦」ですが・・・まだ考えてません！これから考えます！というわけで、次回はネタが思い付けばすぐ、思い付かなければ少々時間がかかるかも知れません。読んで下さってるかたには申し訳ない！出来るだけ早く考えます。次回も付き合っていただければ幸いです！

第十一話　作戦実行

駆け出したアレンは振り下ろされた右腕をきっちりみきった。

「あれ？」

しかし思う用に体が動かない。

「くっ！」

アレンはギリギリでかわした。アレンの左肩が裂ける。

（あぶねぇ～！・・・くそっ、足が言うことをきかねえ！）

「しっかりしろよ！」

アレンは自分の足に文句を言いながら剣を構えた。

†††††

ルナは剣にありったけの魔力を込めていた。

（もうちょっと頑張って！）

アレンの作戦とはこうだった。

「なあ、その剣は魔力を蓄えられるんだろ？」

「ちょっと違うわ。魔力を込めると、どれか一つの属性の魔元素を刀身に集めるの。そして、集めた魔元素の属性に応じて刀身が変化

するみたい。」
「魔元素ってのは魔法の元だよな？じゃあさ、その集めた魔元素を魔法に構成しなおせないかな？」
「多分出来るけど・・・」
「よし、じゃあ聞いてくれ！アイツの皮膚は頑丈で魔法も効かないし、普通の刃物じゃ傷も付けられない。」
「じゃあダメじゃない！」
「聞けって！確に普通の剣じゃ、傷も付けられない。けど、この剣ならなんとか傷を付けられる。アイツは固いのは皮膚だけで、中身は普通のオーガと変わらない。」
「それで、どうするの？」
「この剣で傷を付けて、その傷にルナの剣を突き刺す。そして内側から魔法で吹き飛ばす。」
「だから剣に集めた魔元素を魔法に構成しなおせないか聞いたのね。」
「そういうこと。」
「でもアイツを一撃で吹き飛ばすほどの魔力を剣に込めるのは時間かかるわ！」
「大丈夫！俺が時間を稼ぐから。な？いけそうだろ？」
という事だった。
「もう少し・・・」
ルナは魔力を込め続ける。
†††††
「おっと！」

アレンは相変わらずフラフラしながらもなんとか攻撃をかわし続けていた。

（どこに剣を突き刺せばいいかな・・・やっぱり頭か心臓だよな・・・）

突き刺すべき場所は決まっている。しかし

（高すぎだろ・・・）

通常のオーガの三倍、つまりアレンの六倍は大きいこのオーガの頭も心臓もアレンにとって遥か上空にある。

（どーすっかな・・・）

アレンは考えている。

（アイツが腕を振り下ろした時に腕を駆け上がるしかなさそうだ）

しばらく考えたアレンはこの結論に至った。その時

「アレン！準備出来たわよ！」

ルナが叫んだ。

（よし、勝負だ！）

アレンはルナに頷くと剣を構え、オーガの腕を見た。左腕が振り上げられる。

「馬鹿！どこ見てんのよ！」

突然ルナが叫んだ。

「がはっ！？」

アレンは前から衝撃を受けて吹き飛んだ。

（蹴・・・り・・・！）

オーガの右足を受けて吹き飛んだアレンはそのまま地面に叩き付けられた。

「アレン！大丈夫！？」

ルナが呼ぶが返事が無い。動かないアレンに左腕が振り下ろされる。

「アレン！！！」

左腕は地面まで振り下ろされた。

「・・・そんな！」

ルナは膝をついた。オーガの左腕がゆっくりと持ち上げられた。ルナがもうダメだと思ったとき、左腕の下からアレンがユラリと立ち上がった。

「アレン！」

ルナが呼び掛けるがやはり返事は無い。オーガはアレンが生きてい

た事に驚いたのか一瞬固まっていたがすぐにまた左腕を振り下ろした。しかし、左腕が再び地面まで届く事は無かった。

「うそ・・・」

ルナは眼を疑った。ルナの眼に写ったのは振り下ろされた左腕、そしてそれを左腕一本で受け止めるアレンの姿だった。

「・・・」

アレンは何も言わず、微動だにしない。

（どうしたのかしら・・・）

ルナがそう思って見ていると、アレンは落としていた剣を拾い、今だ受け止めたままのオーガの左腕を無造作に斬り落とした。

「！！！」

ルナは驚いて声も出ない。辺りにオーガの叫び声が響く。アレンはいつもと違う声でルナに言った。

「剣を貸せ。」

ルナは突然言われて驚いたが、素直剣をアレンの方に投げた。それをアレンは見向きもせずに受け取ると、オーガに向かって跳んだ。アレンは一跳びでオーガの胸の辺りまで跳んだ。

「・・・」

アレンは無言で金色の剣を振った。オーガの胸から血が吹き出す。
そして血が吹き出している傷口にルナの短剣を深く突き刺した。

「後はお前の仕事だ。」

アレンは着地すると唖然としているルナに言った。

「！」

我に帰ったルナは呪文を詠唱し始めた。

「闇に輝く星の光よ、ここに集いて闇を打ち砕く十字架となれ。
―スターダストクロス―」

オーガは輝く十字架によって内側から吹き飛んだ。暗闇に月と星と
十字架だけが光輝いていた。

―ドサッ―

ルナは物音がした方を見た。

「アレン！」

そこにはアレンが倒れていた。ルナはすぐに駆け寄った。

「アレン！ちょっとしっかりしなさいよ！」
「・・・」
「馬鹿やってないで早く眼をあけなさいよ！」
「・・・」
「アレン！！！」

「・・・」
「死なないって約束したじゃない・・・！」
「・・・スー。」
「アレ・・・えっ？」
「スー、スー。」
「・・・寝てる。」

アレンは寝息をたてながらぐっすりと眠っている。

「もう！人に心配させといて寝息たてて寝てるなんて！」

ルナは恥ずかしくなって悪態をついた。

「・・・」

アレンは起きそうに無い。ルナはアレンの寝顔を見て呟いた。

「・・・おつかれさま。」

ルナは夜空を見上げて微笑んだ。

第十一話　作戦実行（後書き）

どうもぺたです。今回も読んでいただいてありがとうございます。ようやくネタが思い付きました。書いてる途中で自分自身訳がわからなくなりましたι（オイ）でもどうにかなったと思います（多分ι）さて、今回アレンはちょいとおかしくなりましたね。あれは後々の展開に繋げたいと思います。かなり後になると思いますがιそれでは次回も付き合っていただければ幸いです。

第十二話　黒髪の少女

「・・・ん。」

アレンは朝の光で眼が覚めた。

「・・・あれ？ここどこだ？」

気が付けばそこは知らない部屋だった。

（・・・あれからどうなったんだ？俺、トジって蹴り飛ばされた所までは思い出せるけど・・・）

思い出そうとするが思い出せない。

（あ～ダメだ。まだ頭がボーッとする・・・）

「アレン！」

ルナの声がした。

「眼が覚めたのね！」

ルナが駆け寄った。

「そんなに叫ぶなよ。まだボーッとするんだから・・・」

「なに言ってんのよ！丸一日寝ておきながら！」

「えっ？」

「えっ？じゃないわよ！あなたはあの時倒れてから、今までずっと

寝てたの！」

アレンは気になっていた事を聞いた。

「なあ、あれからあのオーガをどうやって倒したんだ！？」

「？なに言ってんのよ、作戦通りだったじゃない。」

「！そ、そうだったよな！」

「？」

不思議がるルナをよそにアレンは考え込んでいた。

（作戦通り？）

アレンにはあのオーガを倒した記憶がない。

（どうなってんだ？）

アレンは気になったが深く考えない事にした。

「所でここどこ？」

「病院よ。」

ルナの話によると、アレンはオーガを倒した後、倒れてそのまま寝ていたらしい。傷だらけだったのでとりあえず病院に運んできたのだそうだ。

「そうか・・・ありがとう。ルナも怪我してたのに・・・」

「大丈夫よ。あなたこそ傷だらけじゃない。」

アレンは自分が包帯だらけである事に気付いた。

「ははっ！そりゃそうだ！」
「本当にもう！」
ルナはそう言いながら笑顔だった。
†††††
とある城、そこに広がる綺麗な部屋。その部屋で椅子に少年が持たれかかっている。１６歳程で黒髪である。
「・・・！寝てたのか・・・」
少年の前にある机には書類が山積みになっている。
「相変わらずめんどくさい事やってんな。」
その部屋にもう一人１８歳ほどの少年が入ってきた。鮮やかな金髪である。
「オウガ・・・」
オウガと呼ばれた少年はツカツカと黒髪の少年に近付いた。
「ヒリュウは仕事好きだね～。」
オウガはそう言って書類の山を見た。黒髪の少年はヒリュウと言うらしい。二人とも紅い眼をしている。
「お前も長なら少しは仕事をしろ・・・」
「へいへい。・・・そういやな、昨日仕事をしに行ったら、誰かが

先にやってた。話によると黒髪で金色の剣を持ってたらしい。あともう一人女がいたらしいが。」
「・・・王の力を継ぐ者か！？」
「さあな。詳しくはわからん。だがおかげで仕事が楽になれば言うこと無しだ。」
「まったくお前は・・・」

それからヒリュウの愚痴は延々と続いた。

†††††

翌朝

「・・・ん。」

アレンは朝早くに眼が覚めた。時刻はＡＭ３：２４。

「・・・よし。体を動かしに行くか。」
アレンは病院を抜け出し、中庭に立った。この病院は中庭を囲むように建っており、中庭はかなり広い。剣を二本抜いて構える。そして記憶のままに剣を振った。

（やっぱりまだまだだな・・・）

記憶と自分の動きのズレを感じて思う。

「ふぅ・・・」

溜め息をつきながら剣を鞘に納めた。

「すご～い！」

アレンは声がした方を見た。そこには黒髪でショートカットの黒い眼をした１４歳ぐらいの女の子が立っていた。女の子はパチパチと拍手をしながらアレンに近付いてきた。

「凄い剣技ですね～。剣を振った時の風圧がこっちまで届きましたよ～。」

「それはどうも・・・」

「私はハルナって言います。」

その女の子、ハルナはドンドン話を進めていった。

「お兄さんの名前聞いてもイイですか？」

「あぁ、俺はアレン。」

「あれ？アレンさん怪我してるんですか？」

「えっ？」

アレンの肩の包帯から血が滲んでいた。

「ちょっと見せて下さい。」

「いたっ！」

ハルナはアレンの肩に手を当てた。

「はっ！」

次の瞬間、ハルナの手が光った。

「おい！いきなりなにするんだよ！」

アレンは突然傷に手を当てられたので怒った。
「ごめんなさい。まだ痛みますか？」
「・・・あれ？」
アレンの肩の痛みが消えた。包帯を取ってみると傷が消えていた。
「いったいどうなって・・・」
アレンは驚いてハルナの顔を見た。
「魔法？」
「違います。氣です。」
「き？」
ハルナは説明し始めた。
「えっとですね、人も動物も植物も、生きているものは全て氣がかよっているんです。さっきはアレンさんの氣を肩に集めて傷の細胞の再生速度を早めて・・・」
「と、とにかく俺の傷は治ったって事だよね？」
（全然わからんし）
「はい。そういうことです。」
ハルナはにっこり微笑んだ。
†††††
なんだかんだで仲良くなったアレンとハルナは二人で病室までの道

を歩いていた。

「それでですね～・・・」

「あはは・・・」

他愛もない話をしながら歩いていると、

「アレン！！！」

後ろからルナの声が聞こえた。

「・・・あんた、何してんの？」

「えっ・・・？ちょっと体を動かしに・・・」

「へ～・・・女の子と一緒にね～・・・」

ルナはアレンとハルナが一緒に歩いているのを見てなぜかイライラした。

「な、なに怒ってんだよ！」

なぜかアレンも焦った。

「アレンさんの彼女さんですか～？」

「「違います！」」

声がそろう。

「ヒトが心配してるのに自分は女の子とデート？」

「デートじゃないって！ハルナとはさっきあったばっかりで・・・」

「問答無用！」

色とりどりの魔法が飛ぶ。

「ぎゃぁあぁぁぁ！」

アレンはもう一度ハルナの氣による治療を受けた。

†††††

「凄い・・・」

ルナもハルナに治療を受けた。

「いったいどうなってるの？」

「生きているものには全て氣がかよっているんです。その氣を集めて傷の細胞の再生速度を・・・」

「そ、そう・・・」

（全然わかんないし）

ルナを遠くから見ていたアレンは思った。

（ルナのやつ絶対わかってないな）

ルナとハルナはすぐに仲良くなった。

（なんか俺やられ損じゃね？）

そんなことを考えながらアレンは二人のやりとりを見ていた。

「へ～、ルナさんはアルテスタ出身なんですか。」

「そうよ。」
「でも、アルテスタは身分が高いヒトしか住めませんよね？ルナさんは貴族なんですか？」
「えっと・・・私は、王族なの。」
「えっ？王族？」
「そうだよ。ルナは正統王位継承者なんだ。」

アレンが口をはさんだ。

「ご、ごめんなさい！なれなれしく話かけてしまって・・・！」
「いいのよ！もうアルテミス王国は無いんだから王族なんて関係無いのよ！」
「で、でも・・・」
「俺たち庶民にはやっぱりね～。」
「ですよね～。」
（こいつら・・・）

ルナはイライラを抑えながら言った。

「なに言ってんのよ！アレンだってアルテスタ出身のくせに！」
「そ～なんですか？」
「そ～なのよ！しかも王族の血と剣聖の血を引いてるのよ！」
「え～それは庶民には近寄りがたいです～。」
（あっさり寝返った！）
「でしょ～！」
「お二人はどうしてこの町にきたんですか？」
「それはね～・・・」
「おい！そんな簡単にばらしてイイの？」
「別に構わないんじゃない？」
「そういうもんか？」

「そういうものよ。」

そういうとルナはハルナに自分達の事情を話した。

「そうなんですか～。大変ですね。」

「そうだ、そういえばハルナはこの町に住んでるのか？」

「違います。私はとある理由で旅してるんですけど・・・」

「理由？」

「もう！デリカシー無いわね！」

「いいんですよ。・・・兄を、探してるんです。」

「お兄さんを？」

「はい。私の産まれた村はもう地図にはありません。」

「それって・・・！」

「はい、悪魔に襲われて・・・私が三歳のときでした。村は全壊、生き残ったのは私と母だけでした。」

「・・・」

「全壊した村から出てきた遺体の中に兄の遺体だけが無かったんです。」

「・・・」

「普通に考えて生きているはずありません。でも、兄は今でもどこかで生きている、そんな気がするんです。私、おかしいですよね。」

「そんなことない。きっと生きてるよ。ハルナがそれを信じるかぎり。」

「アレンさん・・・ありがとうございます。」

ハルナはわずかに微笑んだ。

†††††

「お二人はこれからどこに行くんですか？」

ハルナが聞いた。さっきまでのしんみりした空気はもうない。

「えっと、とりあえずリベリアに行くんだけど・・・」
「そんなに遠くまで！じゃあ、途中でいろんな町に行きますよね？」
「多分・・・」
「じゃあ私もついていきます！」
「・・・えっ！？」
「いいですよね！」
「危ないからダ・・・」
「いいわよ。」

ダメと言おうとしたアレンの言葉を遮ってルナが答えた。

「やった～！いつ出発するんですか？」
「明日の朝よ。」
「じゃあ私準備してきます！」

ハルナは帰っていった。

「遅れちゃダメよ～！」
「はぁ～い！」

アレンはルナに言った。

「おい！」
「いいじゃない別に。ハルナちゃんはお兄さんを探してるんだから
いろんな場所に連れてってあげれば。」
「そりゃそうだけど、危ないだろ！」
「・・・あんたが守ってあげればいいじゃない。もしかして、自信
ないの？」

「そんな事ないけど・・・」
「じゃあいいじゃない！それに・・・」
ルナはニヤリとしながら言った。
「ハルナちゃんがいれば治療費がかからないじゃない！」
「・・・」
（それが目的か！）
ルナの眼を見たアレンは、もう何を言っても無駄だと悟った。

第十二話　黒髪の少女（後書き）

どうもぺたです。今回突然出てきたヒリュウとオウガは何者なのか？それはまた後々にでも。今回旅のお供に加わったハルナですが、今だ詳しい設定は無しです。ハルナの兄ちゃんどうしようかな～ι

というわけで、次回に続きます。

第十三話　パフェ

「アレン！報酬を貰いにいくわよ！」

昼食をすませるとルナが言った。ハルナのおかげで二人は退院し、ホテルに戻っていた。

「報酬？あぁ、依頼のやつか！」

アレンは報酬の事をすっかり忘れていた。

「そうよ。１００万Ａよ！」

「確に１００万Ａ分はある依頼だったなぁ」

「さあ、行くわよ！」

二人は依頼主の家に向かった。

†††††

「どうもありがとうございました。」

「いえいえ、それでは。」

アレンとルナは報酬をもらい、二人で通りを歩いていた。

「必要な物を揃えましょ！」

ルナがそう言うので店を探しながらうろうろする。アレンの眼にひとつの看板が映った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

長旅の食糧はここで！

保存の効く肉、魚、野菜、何でもあります！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ルナ、ここでいいんじゃ無いか？」

「・・・」

アレンは話しかけたが返事は無い。顔を覗くと何かに目を奪われている。

「？」

ルナの視線の先を見るとそこには喫茶店。その中のあるテーブルに視線は注がれていた。

「こちらが特大パフェになります。」

超巨大なパフェを二人がかりで持って来るウエイトレス。そして頼んだ事を後悔している三人組の女の子。ルナの視線をもう一度確かめる。確に見ている。超巨大なパフェを。

「ルナ？」

アレンはもう一度呼んだ。

「！な、なに？」

「食べたい？」

「！な、なんの事・・・」
「視線が釘付けだよ。パフェに。」
「・・・／／／」

ルナは無言で頷いた。

「・・・食べる？」
「いいの？」
「いいんじゃない？１００万あるし。」
「で、でも無駄使いは・・・」

遠慮するルナにアレンがもう一度聞く。

「食べる？」
「・・・うん！」

ルナは子供の様な顔で笑った。

（・・・かわいい）

アレンはルナの笑顔に見とれた。

（普段はなんだかんだうるさいけど、笑うとかわいいかも・・・）
「どうかした？」
「えっ？何でもない！」

アレンは突然ルナに聞かれて焦った。

「？」

ルナは首を傾げている。

「よ、よし！じゃあ行くか。」

「うん！」

アレンとルナは喫茶店へと入っていった。

†††††

「お待たせしました。こちらが特大パフェになります。」

本日二回目のパフェに店内の視線は集まっている。

「♪」

ルナは嬉しそうにパフェをながめている。

「ではごゆっくりどうぞ。」

ウエイトレスはそういって去っていく。アレンは改めてそのパフェの巨大さを確かめた。

（・・・でかい）

そのパフェは人ひとり分程あった。

「いただきま～す♪」

ルナはにこにこしながらパフェを食べ始めた。

―3分後―

ルナは最後の一口を口に運ぶ。今や店内の全ての人がこっちを見ていた。

「ごちそうさまでした。」

ルナはスプーンを置いた。と、同時に店内から歓声が上がった。かわいい顔した女の子が自分よりも大きいかもしれないパフェを3分で完食したのだ。当然である。

「・・・」

アレンは言葉を失った。

「どうかした？」

ルナがにこにこしながら聞いた。

「えっ？いや、よく食べるな～って。さっき昼飯食ったばっかりなのに・・・」

「甘いものは別腹なの♪」

ルナはあっさりと言った。

（別腹なの♪って・・・そもそも自分よりでかいもん食って大丈夫なのか？てか、食った分の体積は一体どこに・・・）

アレンがそんなことを考えていると、ウエイトレスが近付いてきた。

「こちらが代金になります。」
ウエイトレスはそういってレシートを置いた。アレンはそれを拾って見た。
「？あれ、－５万Ａ？」
店長が近付いてきて言った。
「特大パフェは一杯２万Ａなんだが、３０分以内に完食した場合は５万Ａプレゼントだ。」
「そうなんですか？」
ルナは聞いた。
「おう。お嬢ちゃんには負けたよ。まさか3分で完食するとは・・・」
「じゃあもう2杯！」
店長の顔から笑顔が消しとんだ。
（ご愁傷様です）
アレンは心の中で呟いた。この日、この喫茶店は経済的に大打撃。
この日から、一杯２万Ａの特大パフェはメニューから姿を消した。
そして、ルナは後々この喫茶店の伝説として語り継がれることになる。
†††††
「得したわね！パフェを食べるだけで１５万よ！」

ルナは嬉しそうに笑った。

「『食べるだけ』ねぇ・・・」

アレンは呆れた。二人は喫茶店を出て、必要な物を買い揃え、ぶらぶらと通りを歩いていた。

「そろそろ帰りましょうか。」

「そうだな。」

二人はホテルに向かった。

†††††

「おっはよ〜〜ございま〜す！！！」

翌朝、ハルナがやけに高いテンションでホテルにきた。

「お、おはよう。」

アレンは高いテンションに圧倒されながらもちゃんと返事をした。

「あら、ハルナおはよう。

」

「おはようございます〜。」

ルナは台所から出てきた。今日の食事はルナが作る番だ。再びルナは台所に戻った。

「それよりアレンさん・・・」
「ん？」
ハルナはヒソヒソと声を潜めながらアレンに近寄った。
「見ましたよ～。二人共ラブラブですね～！」
「？」
「とぼけたってダメですよ～、昨日二人でデートしてるところを見ましたから！」
「あ、あれはただ買い物に・・・」
「とってもいい雰囲気でしたよ。」
「いや、だから・・・」
「ルナさんとっても幸せそうでしたよ！きっとアレンさん一緒にいるのが嬉しいんですね～！」
嬉しそうだったのはパフェのせいだ。アレンがそう言おうとした時、
「二人でコソコソとなに話してるの？」
台所からルナが言った。
「何でもないですよ～。」
ハルナはとぼけたように言った。
「あっ、そう言えば知ってますか？」
「なにを？」
「昨日ですね～、通りの喫茶店の特大パフェ３杯を１０分で完食した人がいるらしいですよ！」
「！」

「凄いですよね～！一体どんな胃袋してるんですかね？きっと熊みたいな体格してますよ！」
「・・・」
「・・・」
「・・・あれ？どうしたんですか二人共？」

―バン！！！―

荒々しくテーブルに朝食が置かれる。

「朝ごはん出来たわよ。」
「・・・」

三人は気まずい空気の中で朝食を食べた。

第十三話　パフェ（後書き）

どうもぺたです。最近更新が遅くてすみません！出来るだけ頑張ります！さて、今回はのほほんとしてましたね。次回から旅を再開すると思います。ハルナは無駄に元気なんでどうなる事やら。次回も付き合っていただければ幸いです。

第十四話　予選開始

「そろそろ新しい町ですか！？」
「早すぎるわよ！！！！」

三人はアイフリードを出て次の町を目指して歩いていた。照りつける日差しが体力を奪っていく。しかしそんな中、

「とにかく急ぎますよ！」
（・・・テンション高いなし）

ハルナのテンションが異常に高い。

―1時間前―

「ちょっとそこのにいちゃん！」
「俺？」

ホテルを出ようとしたとき見知らぬ男が話しかけてきた。「隣町のクライムで武道大会が開かれるんだけどにいちゃんも参加してみないかい？」
「武道大会があるんですか！」

食い付いたのはハルナだった。

「おうよ！勝敗を決めるのは己の拳だけ！にいちゃんは、なかなか強そうだ。俺の眼に狂いは無い！にいちゃんなら優勝出来るぜ！」
「そ、そうかな・・・！」
「何乗せられてんのよ！あんたが優勝出来るわけ無いでしょ。それ

にそんなものに付き合ってる暇は無いわ。」「そこまで言わなくても・・・ι」
「と言うわけでアレンは出場しないから。」
「そうか、もったいねぇな。優勝賞金は１００万Ａなんだけどな。」
「出場するわ！」
「おい！」
（お前も乗せられてんじゃねぇか！）
「私も出ます！」

ハルナが眼をキラキラさせながら言った。

「ハルナちゃん！あなた戦えるの？」

ルナが聞く。

「はい～！ちっちゃい時から武術をやってました～！今まで一人で旅してきたんですよ！戦えないとやっていけませんよ！」
「それもそうね。自信はある？」
「ありますよ！優勝狙いです！」
「よし！わかったわ！この二人が出場するわ！」
「はいよ～！そんじゃ参加費一人１０万Ａね。はいこれチケット。」
「絶対にどっちかが優勝するのよ！」
「もちろんです！」
「お前らな～ι」

ーーーー

「早く着かないかな～♪」

「ハルナ～、なんでそんなにテンション高いんだよ。」

アレンが聞いた。

「いやぁ、最近運動してないか体がなまっちゃって。久しぶりに武術をやれると思うとつい～♪」

（付き合わされるこっちはたまったもんじゃないよ…）

「ハルナ、ちょっと休憩・・・」

「なに言ってるんですか～！早く行きましょう！」

「ハルナちゃん！待ちなさい！」

「置いてきますよ～♪」

ハルナはニコニコしながら二人を急かしている。

「「・・・…」」

アレンとルナは顔を見合わせて溜め息を着き、歩き出した。

†††††

「着きました～☆」

「ここか・・・」

「ようやく着いたわね・・・」

「？どうしたんですか二人共！元気ないですよ～？」

「この炎天下の中、５時間ぶっ通しで歩き続ければ元気も無くなるわよ！！！」

結局三人は炎天下の中を急ぎ足で歩き続けた。「登録は向こうですね！行ってきます！」

「・・・」

ルナはハルナの笑顔になにも言えなかった。

「ほら！アレンさん、行きますよ！」

「ち、ちょっと休憩・・・」

その言葉も虚しく、アレンはハルナに引きずられていった。

†††††

ルナは二人がいなくなったのでどうしようか迷っていた。

「私一人待たせるなんて！」

ルナは一人でブツクサ言いながら立ち尽くした。

（なにしてろっていうのよ！）「ルナ様・・・？」

「えっ？」

ルナは突然後ろから名前を呼ばれて驚いた。

「あなた誰？」

振り向くと白髪の老人が立っていた。

「覚えておられないのも仕方ないかもしれません。私はルナ様が御幼少の頃、教育係を務めさせていただいたルドゼブという者です。」

「あっ！ルド！！久しぶりね！」

「お綺麗になられて。見違えましたぞ！」

「褒めたってなにも出ないわよ？それにもう王族は滅んだのだから、そんなに堅苦しくしないで。」

「いやいや、これは私が王族ではなく貴方に忠誠を誓っている証です。そして貴方は本当にお綺麗ですぞ。」
「ふふっ、ありがと！」
ルナは照れてはにかんだ。
「それにしても、ルドは元気ね！」
「これでも貴方の教育係ですからな。貴方にはかなり手をやきましたよ。」
「もう、ルドったら・・・それより、よく私だってわかったわね！」
「！・・・貴方のその蒼い眼と、美しい金色の髪を・・・私が間違える筈がないでしょう。」
ルドゼブはそう言ってやさしく笑った。
†††††
「受付はどこなんでしょう？」
「見当たらないね。」
アレンとハルナは武道大会が開かれるらしい広場にいた。広場は早くも飾り付けられ、出店が並び、まさにお祭りムードだった。
「賑やかだな。」
「そうですね～。」
二人がそんなことを話していると、
『あ～、あ～只今マイクテスト中、あ～』

拡声器による放送が流れた。

『武道大会に出場予定の皆さんにお知らせでーす。』

響いたのは軽薄そうな男の声。

『武道大会出場予定者が全員この町に集まったのを確認しました。只今から武道大会予選を始めます！ルールは簡単、出場予定者が８人になるまで皆さんで潰しあって下さい♪出場予定者じゃない人に攻撃を加えた場合チケットが爆発するから気を付けてね♪』

「何て適当なんだぃ」

「面白そうじゃないですか♪」

「そ、そう？」

「はい♪♪♪」

『皆さん用意はいいですか？そんじゃあ始めてくださーい！』

ピーという機械音が拡声器の向こうで響き、始まりを告げた。

第十四話　予選開始（後書き）

どうもぺたです！
久しぶりの更新です。楽しみにしてくれている読者の方（いるのか？）には申し訳ありませんでした。
最近忙しいです。次も遅くなると思います。
最近新しい小説を書こうかと思っています。だからますます更新速度が落ちると思います。次もお付きあいいただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7924a/

剣と魔の誓い

2010年10月26日05時47分発行